

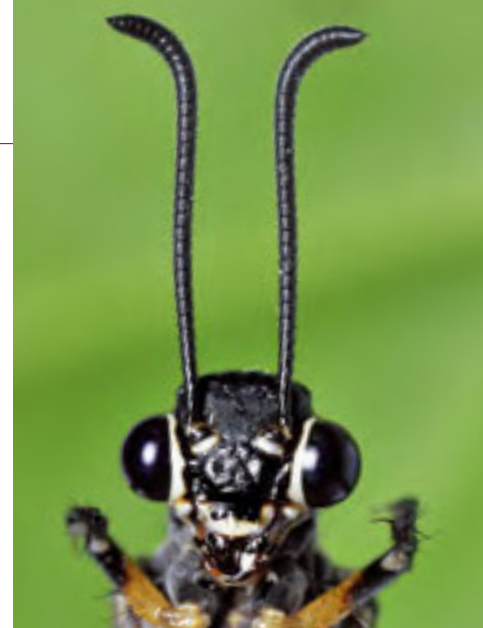
昆虫の顔 ②



ハラビロカマキリ(カマキリ目)
おちょぼ口だが、大あごの切れ味は鋭い。昼行性だが、夜間も活動し、その時大きな複眼は黒くなる。(p92)



ラクダムシ(アミメカゲロウ目)
顔の各部は小さくまとまって見えるが、後頭部が大きい。捕食性で、アブラムシなどを食べる。(p121)



ウスバカゲロウ(アミメカゲロウ目)
太い触角とつぶらな複眼で一見ひょうきん者に見えるが、捕食性で鋭い大あごがある。(p120)



オオスズメバチ(ハチ目)
発達した複眼の間の頭楯は本当の楯のよう。強そうな大あごは獲物を噛み切り、砕いて肉団子にする。顔全体が武器のようだ。大あごは巣作りでも活躍し、カチカチと音を立てて威嚇にも役立てる。しかし、大あごを使うのはすべて家族(巣の仲間)のためであり、自分用の口は大あごの奥にあるなめる口だ。昼行性。(p160)



ホンヒラタアブ(ハエ目)
高速で飛びながら異性を探す、産卵場所(アブラムシのいる植物)を探すなど、視覚生活をするため複眼は大きく発達している。伸縮式の口物を格納する隙間がある。昼行性。(p170*)



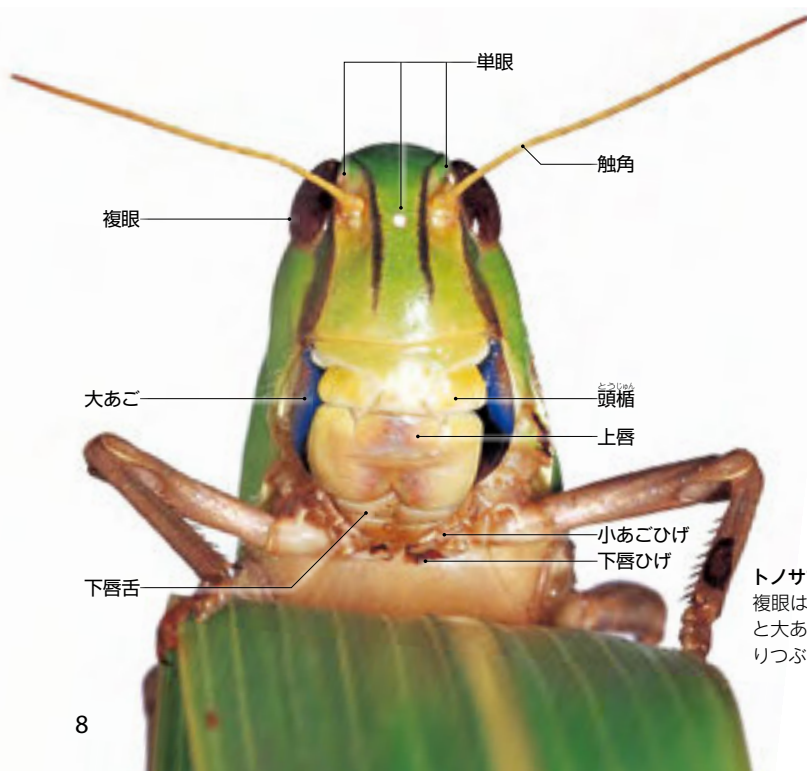
イトトンボの一種(トンボ目)
顔の両側に大きな複眼。3個の単眼も発達している。空中で獲物を発見し、捕らえる。(p86)



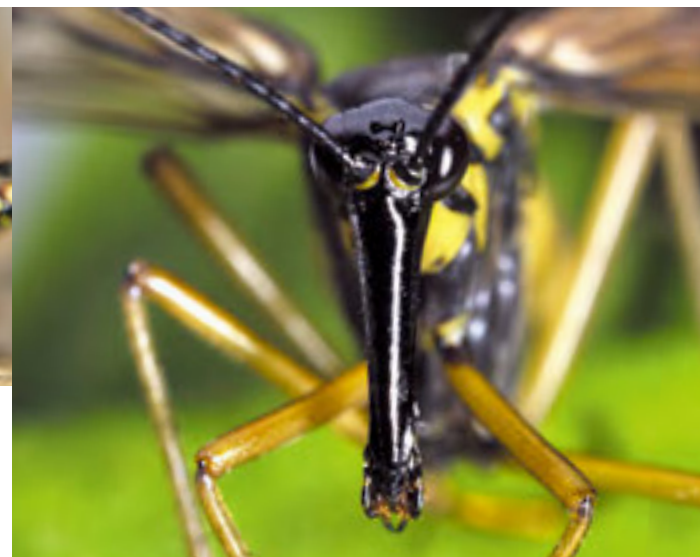
ハサミムシの一種(ハサミムシ目)
地表を歩くためか顔は上向き。複眼は小さく、触角も短め。扁平なのは石の下など狭い空間生活の適応であろう。軟らかい動植物質を食べる。夜行性。(p98)



ノコギリクワガタ(コウチュウ目、標本)
大あごは雌の獲得のためだけに強大に進化したといっただろう。本当の口は小さいなめる口だ。それにしても、ここまでやるか?(p128)



ヤマトタマムシ(コウチュウ目)
大きな複眼。頭全部が顔のようだ。小さな口は葉を縁からかじるため。昼行性。筆者にはアンパンマンの顔に見えた。(p133)



ヤマトシリアゲ(シリアゲムシ目)
長い顔は頬と前頭・頭楯部分が伸びたもの。先端に小さなおちょぼ口。獲物の体に口先を入れて食べるためなのか。クモの獲物を横取りするには便利そうだ。昼行性。(p164)



シイシギゾウムシ(コウチュウ目)
長い顔でもヤマトシリアゲのそれとは雰囲気違う。触角が中央付近にあり、これは格納式だ。先端には口器があり果実に孔をあける。これは産卵のためのものだろう。(p149*)